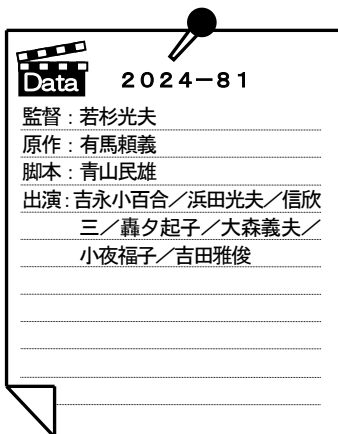




みどころ

吉永小百合の“日活の銀幕デビュー作”をはじめてスクリーンで鑑賞！1945年3月13日生まれの彼女が16歳（中3）の時の作品だが、『キューポラのある街』（62年）でみた貧乏人の娘がお似合いなら、大学助教授のお嬢様役もしっかり決まっている。

お相手は後に純愛コンビ（ゴールデンコンビ）を組む浜田光夫（当時は光曠）だが、本作の設定は、外交官令嬢とチンピラヤクザとの純愛を描いた『泥だらけの純情』（63年）とそっくり！？もっとも、『ガラスの中の少女』という邦題の意味が暗示される冒頭のシーンと、ガラスのように静かな湖にボートを浮かべ、あっと驚く行動（決断）を見せるラストのシーンをあなたはどうか考える？

同時代に久保浩が歌ってヒットした「霧の中の少女」（64年）を彷彿させる、若杉光夫監督の演出に感服しつつ、若い2人が積極的にそんな選択をしたことの意味をしっかりと考えたい。

それにしても、「結婚するまで純潔を守ることが父親の責任だ」との主張に固執する父親の姿は、今や天然記念物？もしくは化石？自由奔放な性とどちらがいいのかは、私にはよく分からないが・・・。

■日活でのデビュー作を、64年後にはじめて鑑賞■

吉永小百合のデビュー作は1959年の『朝を呼ぶ口笛』だが、日活入社直後の主演デビュー作が本作。浜田光夫との初共演作だが、彼の実名はこの時浜田光曠だ。また、本作の原作は有馬頼義の小説だが、同作は1980年代後半に国民的美少女となったゴクミこと後藤久美子主演で東映版『ガラスの中の少女』（88年）も公開されているので、それにも要注意。

他方、私が縁あって、2008年10/31～11/27に放映された「スカパー！」の『祭りTV！

吉永小百合祭り』にゲスト出演した時も、私は本作を未鑑賞のままだったので、『キューボラのある街』に続いて上映されていることを知ると、ベストタイミング。こりゃ必見！

■□■本作は64分！冒頭はまるで「霧の中の少女」！？■□■

昨今の映画はほとんど2時間前後で、90分前後のものは少ない。まして60分で終わる映画はまず存在しない。それがより充実した映画にするためなら問題はないが、無駄なエピソードをたくさん入れ込んでいるためであれば、問題ありだ。しかし1960年代の日活映画は90分前後が標準だし、60分台のものもたくさんあった。本作も64分だから、ある意味で“ワンイシュー映画”だが、ストーリーがテンポよく展開していくし、脚本も充実しているから、「短くて物足りない」と感じる人はいないはずだ。

他方、本作が『ガラス中の少女』とタイトルされたのは、一体なぜ？白黒画面のテレビが我が家に入ってきたのは、私が中学2年生の頃。観る番組を親から制限されていたが、私は、毎週日曜日の玉置宏が司会する『ロッテ歌のアルバム』や、藤田まことの『てなもんや三度笠』、『シャボン玉ホリデー』等は欠かさず観ていた。また、船木一夫の『高校3年生』が大ヒットしたのは私の中学3年生の修学旅行の時だが、橋幸夫、船木一夫、西郷輝彦の“御三家”の人氣が高まっていた当時、単発的に登場した歌手（一発屋？）の一人が、『霧の中の少女』（64年）を歌った久保浩だった。その他にも、梶光夫の『青春の城下町』（64年）、伊藤咲子の『ひまわり娘』（74年）等を私は今でもよく覚えている。ちなみに、『霧の中の少女』の歌詞は、「涙はてなし雪より白い 花より白い君故かなし あわれ少女よ霧の中の少女 消えて帰らぬあの世の街角 いまも僕の心のうちに生きてる君よ」と切々と歌われるものだった。そんな歌を聞くことは、男ばかりの中高一貫進学校に籍を置き、毎日の味気ない受験勉強を強いられていた私には数少ない気晴らしの1つだった。

しかして本作は、とある湖に浮かんでいる少女の死体が発見されるシークエンスからスタートする。村人たちの1人は駐在に報告に行き、その他大勢は死体の引き上げに向かったが、可憐なワンピース姿で上を向き、水死体になっている少女は一体誰？そして、なぜこんな姿に？湖はガラスの面のように穏やかだから、本作が『ガラスの中の少女』とタイトルされたわけだが、久保浩の『霧の中の少女』の歌詞を覚え、その曲のイメージをしっかり持っている私には、濃い霧の中で水死体の引き上げ作業に向かう本作冒頭のシークエンスを観れば本作のタイトルは、「ガラスの中の少女」よりむしろ「霧の中の少女」の方が適切だと思ったが・・・。

■□■純潔のまま嫁に！大学助教授の娘にはそれが絶対！■□■

聖母マリアは処女受胎したが、それは神の子イエス・キリストを生むための例外中の例外だ。そのこともあって、古今東西、洋の東西を問わず、結婚前の女性が純潔を保つことは何よりも大切なこととされてきた。21世紀に入った今は、「そんなことを言う大人は、時代遅れもはなはだしい化石人間」と言われそうだが、有馬頼義の小説でも本作でも、1960年という時代では、大学助教授の娘という靖代のような“良家の子女”にはそれが絶対！

したがって、15歳の一人娘・靖代の父親・杉太郎は、靖代を純潔なままで結婚させることが父親の使命と考えていたらしい。なるほど、なるほど。

もともと、“純潔”って一体ナニ？日本がアメリカと戦争したことすら知らない今ドキの10代の女の子に、その意味はわからないだろう。

■□■『泥だらけの純情』と類似のテーマに注目！お嬢サマ役も■□■

吉永小百合と浜田光夫という純愛コンビによる名作の1つが『泥だらけの純情』(63年)。同作は今回の吉永小百合映画祭では上映されないが、私は藤原審爾の原作を映画化した同作が大好きで、TVでは何度も観ている。同作は吉永小百合演じる、“深窓の令嬢”の典型のような外交官の一人娘が、浜田光夫演じるチンピラヤクザと恋に落ち、最後には悲劇的結末になってしまう、タイトル通りの「泥だらけの純情」を描いた名作だった。しかして、本作もそれと類似したテーマ。結末こそ違え、悲しい結末になってしまうストーリー展開は両作とも同じだ。ブルーリボン賞の作品賞等を受賞した『キューボラのある街』(62年)では、貧しさにめげず、明るくたくましく生きる中学3年の女の子役を見事に演じて、鮮烈な印象を日本中の国民に与えた吉永小百合が、本作では、『泥だらけの純情』で観た外交官の娘ほどの深窓の令嬢ではないものの、大学助教授の一人娘という、当時の日本の社会では間違いなく“いいところのお嬢様”役を見事に演じているから、それに注目！

ちなみに、浦山桐郎監督の『非行少女』(63年)や西川克己監督の『エデンの海』(63年)に出演した日活の和泉雅子は吉永小百合より2歳年下だが、女優としての演技力は明らかに和泉雅子の方が上、そのことは、『非行少女』がソビエト連邦時代のモスクワ映画祭金賞を受賞した際、審査員を務めたフランスの俳優ジャン・ギャバンが「この子はすごい」と語ったことから明らかだ。もともと両者の演技力を比べると、吉永小百合はある意味で大根役者だが、素のままでどのどん底の貧乏人の娘役がぴったりなら、深窓の令嬢役も演じ分けるところがすごい。同じことが石原裕次郎、浅丘ルリ子との共演で、エキセントリックな女子高生役を演じた『若い人』(62年)でも言えるが、中学生の時の映画出演でありながら、素のままで、そこまでの演技ができる女優・吉永小百合に拍手！

■□■渋谷駅での出会いは？稚拙な恋のテクニクにも注目！■□■

戦後の民主主義を代表する青春文学が、石坂洋次郎の小説『青い山脈』。それを吉永小百合主演で映画化したのが日活版『青い山脈』(63年)だが、同作では「変しい、変しい」と綴られたラブレターがストーリー構成のポイントになっていた。しかして本作でも冒頭の渋谷駅での靖代と陽一の“偶然の出会い”が、実は陽一の計算尽くしのものであり、そこで語られるのはかつて中学生の陽一が靖代に渡そうとしたラブレターの件であることが興味深い。また、2人が入った喫茶店で陽一が注文するのがあんみつであることや、靖代が手をつけないそれを陽一が遠慮なく食べてしまうところも興味深い。

さらに興味深いのは1960年公開の本作では、陽一が偶然を装って靖代と待ち合わせる渋谷駅が、巨大な再開発ビルになっている現在のそれではなく、戦後15年を経過した時点で

の渋谷駅であることだ。フランク永井が歌って大ヒットした曲の1つが『有楽町で逢いましょう』(57年)だが、愛媛県松山市に住んでいた私には、有楽町駅や有楽町のティールーム、そして、そこに流れている甘いブルースも全く理解できなかったが、そこに松山の田舎町にはない都会の香りと憧れを感じたのは当然だ。そう考えると、1960年当時の有楽町界限には洒落たティールームがあり、甘いブルースが流れていたのだろうが、渋谷駅はまだ田舎だったらしい。ましてや、渋谷駅の近くにある陽一が働く町工場は、工場とは名ばかりの“掘っ立て小屋”といった方が適切かもしれない代物だ。また『キューポラのある街』でみた吉永小百合演じるジュンの父親が勤める川口市特有の鋳物工場は巨大なものだったが、本作のそれは下請け孫請けの個人経営工場だからチャチなことこの上ない。そんな工場で働きながら、酒飲みの父親らと一緒に暮らしている陽一は高校にも進学できなかったから、高校生の靖代はある意味で憧れの存在だった。そして大金持ちではないとしても、大きなお屋敷に住み大学助教授の父と母親と一緒に暮らしている靖代は、当然そんな陽一にとって高嶺の花だ。したがって、そんな二人が交際することなど、父親たる杉太郎が認めるはずがないのも当然だ。そんな厳格な父親の下で育ってきた靖代はそれまで父親に嘘をついたことなどなかったが、15歳の思春期ともなれば、さすがに陽一との交際について嘘をついたのは仕方ない。しかし、そんな嘘はすぐにバレしてしまうのも当然だから、そんな事態になると・・・。

■□■実の父親ではない！それは知っていたが、その影響は？■□■

舩田利雄監督の『二〇三高地』(80年)は、日露戦争の旅順攻防戦における二〇三高地の日露両軍の血みどろの闘いを描いた名作だが、その主人公をあえて有名人とせず、あおい輝彦演じる小賀武志という一民間人に設定したのが大きなミソだった。ロシア語に通じていた小賀は少尉(小隊長)として招集されたから、夏目雅子演じる恋女房・松尾佐知とは結婚式こそ挙げたものの、籍も入れず、初夜の床も共にせず、佐知を純潔のまま残して出征したが、それは何のため？その真相を知れば、あなたはきっと驚くはずだ。また、そんな超大作の主題歌は、さだまさしが歌った『防人の詩』(80年)だったから、それにもビックリ！小賀武志が新婚初夜に床を共にせず新妻の純潔を守った理由を考えることは、本作で靖代の父親・杉太郎が持つ「結婚までは純潔を守ることが何よりも大切」という考え方を理解することにも通じるので、それをしっかり考えたい。

本作中盤では、靖代の母親・里子が杉太郎の教え子だった男性と結婚し、すぐに靖代を産んだものの、特攻に赴いた夫が、「もし自分が死んだら里子のことをよろしく頼みます」と杉太郎に書き残していたところから、杉太郎と里子が親しくなり、靖代を連れ子として結婚したという事情が明かされる。しかし、幼い時に母親から「明日からおじさんではなくお父さんと呼びなさい。」と言われた靖代は、どうやらその時点で一気に事情を飲み込んでいたらしい。

もともと、靖代の新しい父親になった杉太郎は、死んでいった本当の父親に代わる父親

としての責任感もあって、「結婚するまで靖代の純潔を守ることが自分の役目」という信念を持っていた反面、自分が継父であることの負い目もあったらしい。しかし、里子の口から靖代はしっかりそれを知っている上、そのことに何のこだわりもないと聞かされると、杉太郎は一安心だ。そんな時、杉太郎は北海道の大学に教授として赴任することが決まったから大喜び。家族 3 人で自然豊かな北海道の大地でリッチかつ優雅に生活することへの期待を大いに語ったのはいいが、酒に飲んだ勢いでご機嫌の中、靖代を抱きしめると、そこには明らかに父親の愛情とは異なる男の欲望が！これに靖代がビックリしたのは当然だし、里子も「はしやぎすぎですよ！」とたしなめたが、当の杉太郎にはそんな微妙な娘の女心はわからないようだ。

■□■渋谷駅での最後の出会いは？2 人の行き先は？■□■

そんな中で時が進み、杉太郎たちの引っ越し準備が進んでいたが、靖代の引っ越し準備の進捗状況は？他方、陽一は酒を飲んで荒れる父親と言い争った末に家を飛び出してしまったが、その行き先は？ そんな状況下、2 人はいつものように（？）偶然（？）渋谷駅で落ち合ったが、そこで靖代が「今日はどこか遠い、静かなところへ行こう」と言ったところから、2 人は電車に乗り、某湖でボートに乗り込むことに。ここは一体どこ？そして 2 人はなぜこんな遠いところにやって来たの？

1967 年から 1971 年まで、豊中市の待兼山にある大阪大学で学生時代を過ごした私は、阪急電車の蛍ヶ池駅近くのアパートに住んでいた。そして学生時代の前半は学生運動に、後半は司法試験の受験勉強に明け暮れたが、そんな中でも楽しいデートの時間をみつけ、2 人だけでボートに乗ったこともあった。さらに、生まれてから高校生まで松山市で過ごした私は、夏休みになると梅津寺（ばいしんじ）海水浴場に行って、海水浴に親しんだが、その時の贅沢はボートに乗ることだった。それを思い出すと、町工場で働いている陽一にとって、ボート代は安くないはずだが、他方、靖代はタッグリ小遣いをもらっているのだろう。靖代をボートの後部に座らせて、1 人でオールをこぐ陽一の姿は実に楽しそうだ。そんな中、靖代が出してきた瓶の中に入っていたものは・・・？

私が大学 3 回生終わりの 1970 年 11/25 に起きた三島由紀夫の割腹事件は、日本中に大きな反響を呼んだ。また、古くは明治 36 年、栃木県日光市にある華厳の滝に投身自殺をした 16 歳の第一高等学校（旧制一高）生・藤村操が、「悠々たる哉（かな）天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。・・・萬有の真相は・・・曰く、不可解。」と書き残した遺書「巖頭の感」は有名で、大学 1 回生当時の議論のネタとされたものだ。

それらとの対比においても、陽一と靖代がとある湖で心中事件を起こしたことの是非はしっかり議論されるべきテーマかもしれないが、本作ではそんなクソ難しい議論は不要。ボートの後部に可愛いワンピース姿で座る靖代が、すぐ次のシーンでは死体となって湖面に浮いているので、その対比をしっかりと！！

2024（令和 6）年 12 月 5 日記